

まちやむら、そこに住む人びと（=ざいち）の、
知恵や生き方（=ち）から学び、実践する活動です。

ざいちのち

実践型地域研究ニュースレター No.22 2010年8月

京都大学

生存基盤科学研究ユニット

東南アジア研究所 「在地と都市がつくる循環型社会再生のための実践型地域研究」

長浜市 余呉町

守山フィールドステーション

ソバにかける未来 —東南アジアにおけるソバ活用—

守山 FS 研究員 嶋田奈穂子

夏の初めのころ、フィールドステーションのガレージに、ポツリポツリと芽が吹き始めました。昨年収穫したソバを乾燥させていたときにこぼれた実が、発芽したのです。雑草を抑えるための砂利の間から双葉を出してぐんぐんと伸び続け、酷暑の中で花を咲かせました。ソバのたくましさあらためて目の当たりにし、強い種が取れるだろうと、実がなるのを楽しみにしていました。しかし、結局結実しませんでした。花は見事に咲いていたのですが。



写真1: 結実しなかったソバ。花が枯れた跡だけが残り、あまり実がみられない。4つほど実が見えているが、殻だけで中には実が入っていない。

それからしばらくして、野洲市国際協会（滋賀県）が発行している広報誌「YIFAmate」2010年9月号に興味深い記事を見つけました。東北タイで行われたソバ栽培の記事でした。痩せた土地をもつ東北タイの農業発展に貢献するための試みで、結局は実がならず、失敗だったというものでした。「ソバの開花後の適温は20℃以下で、28℃を越えるとめしべの発育が悪くなり、結実しない」ために、冷涼ではない東北タイでのソバ栽培は難しかったようです。フィールドステーションに生えたソバが結実しない原因も、気温だったことが分かります。

日本でも、気温の下がらない猛暑の中ではソバの実ができないものの、秋に作れば実がなるし、冷涼

な山地はよりソバに適しています。東南アジアでは、東北タイでは出来ないソバ栽培も、ミャンマーでは興味深い背景をもってソバが栽培されています。かつてケシ栽培が盛んに行われ「ゴールドトライアングル」と呼ばれたタイ・ラオス・ミャンマーにまたがる山間地域、そのミャンマーの山地で、ケシに変わる作物としてソバが栽培されているのです。冷涼で水はけが良い高地を好むというケシ栽培の特徴がソバ栽培と一致することから、ソバの可能性が見出されました。収穫できたソバは日本が買い取るという日本の海外援助の形を整え、ケシに代わる換金作物の栽培として動き出したのです。その活動を支える NPO 法人「アジア麻薬・貧困撲滅協会」（<http://www.geocities.jp/npoadpea/index.htm>）によると、ソバ農家は4000戸に達し、毎年数十トンを経済的に輸出するまでに至っているということです。

守山のソバ栽培も2年目をむかえ、種まきには新聞等の取材も受け、大勢の方に参加していただきました。今年の3つの畑のうちの1つはマンション建設が決まり、ソバの花を見ていただける場所が減ったのは残念です。種まきの後、去年収穫した守山中心市街地産のソバを打ち、試食しました。かなりの美味しさに、皆びっくりでした。

こぼれた種から育ったソバには実が付きませんが、これがきっかけとなって、いろいろな地域でソバに未来が託されていることを知りました。私たちも、守山の地域交流や地域ブランドの創出の期待をソバに託した一人です。それぞれの活動が実を結ぶといふと思います。



写真2: 守山産の蕎麦

朽木フィールドステーション

これまでの火入れ、これからの火入れ

朽木 FS 研究員 今北哲也

越前・足羽川源流の河内集落、びわ湖の東、蒲生野・日野、湖西・今津、湖北・余呉の集落、個人、団体の方々それぞれに縁をもらうことが出来ました。《火野山ひろば》5年を節目に、びわ湖の山里での延べ12回の火入れを振り返ってみました。(表参照)

描いてきた<くらしの森>への展開を念頭に現場の特性や作物の出来具合、これからの取り組みを記しました。

- ①これまでの火入れ地は、(a)数年以上の休耕田畑で平坦なカヤ草地／鎌掛や椋川 (b)林道残土処分やスキー場造成後のカヤ草地や原野／椋川や中之郷 (c)地山の岩までが浅いとか、よく雪崩れるとか、人手の加わり方など、何らかの理由で低木、笹、葛など林が密に成立していない山／中河内、などに分けられる。
- ②作物の出来は燃え草の量と質に負うところが大きい。鎌掛の初年、虫害が発生した(木酢でほぼ回避)。火入れ2年目の中之郷では、十分に焼けず、雑草が繁茂した。中河内3年目の原野では燃え草はイブキザサやその腐植層で、勢いよく焼けた。跡のクサの再生も弱く、早魃害除けば芽立ちした蕪の生育は良好である。
- ③椋川は4年連続の火入れ地は休む。移植後、株を張ってきたカヤ原野に来年は火を入れ、伝統的なカヤダイラ管理を確かめる。中之郷は除地、休閑、栽培の区分けで2～3年おきの火入れにシフトする。中河内の笹原野には山菜や実のなる灌木が点在している。先ずこの現況を足掛かりに<くらしの森>を描いていく。

表：びわ湖の山里／火入れ 2005～2010

《火野山ひろば》

時期	集落名	所有形態	栽培作物	現況と作業内容・生育	協力団体など
2005年 9月	日野町・ 鎌掛	個人有	在来種日野菜かぶ (注1)	・休耕田のカヤやクサ・近山から柴搬入、燃え草を補充して火入れ・虫発生(木酢撒布)	鎌掛集落有志の方、NPO 蒲生野考現倶楽部
2006年 8～9月	日野町・ 鎌掛 (2箇所)	個人有	在来種日野菜かぶ	・休耕田に密生したネザサを刈り払う。火入れ見送り・別の休耕田数坪に火入れ	鎌掛集落有志の方、NPO 蒲生野考現倶楽部
2006年 8月	今津町・ 椋川	個人有	日野菜、河内かぶ (注2)、万木かぶ(注3)、そば、F1 青首大根、カザフ大根	・休耕田のカヤ・製材端材を燃え草に補充して火入れ	椋川集落有志の方
2007年 8月	余呉・ 中河内	個人有	在来種山かぶら	・低木、葛、草類の原野斜面(雪崩れ地)を火入れ	永井邦太郎氏、中河内集落有志の方
2007年 8月	朽木・ 生杉	個人有	F1あかくら蕪 (予定)	・転作田・くつきの森(市立公園)のナラ枯れ枝條搬入・一部火入れ後中止	地元→朽木支所 通じ要請受ける
2007年 4月	今津町・ 椋川	個人有	・コナラ育苗、カヤ株移植(2008年からホトラ山復元作業始める)	・林道残土の造成斜面・乏しい植生。びわ湖のヨシを搬入して燃え草を補充(注4)	椋川集落有志の方
2007年 8月	今津町・ 椋川	個人有	万木、日野菜かぶ、F1 青首、カザフ大根、そば	・初年度と同じカヤ休耕田。虫害大きく収穫僅か	椋川集落有志の方
2008年 8月	余呉町・ 中河内	個人有	山かぶら	・前年と同じ原野斜面の隣に火入れ	永井氏、中河内集落有志の方
2008年 8月	今津町・ 椋川	個人有	万木かぶ、青首大根、そば	・初年度と同じ休耕田のカヤ刈払い・面積三分の一に縮小	椋川有志の方
2009年 7～8月	余呉・ 菅並	共有林／ 菅並生産 森林組合	・山かぶら(予定)	・元タキモン用の山林・植生、埋土種子調査実施・火入れ中止	永井氏、菅並森組有志の方
2009年 8月	余呉町・ 中之郷	共有林／ 中之郷生産 森林組合	山かぶら、F1あかくら蕪、F1青首大根、山形在来種かぶ	・カヤ優占草地・草の種類は多い ・菅並生産森組共有林の伐採枝条、中之郷の杉枝などで燃え草を補充し、火入れ	永井氏、中之郷生産森林組合、ウツディバル余呉
2009年 9月	今津町・ 椋川	個人有	山かぶら、F1あかくら蕪、大根、山形在来種かぶ	・初年度と同じカヤ田の火入れ・ヨシ、製材端材で燃え草を補充	椋川有志の方
2010年 8月	余呉町・ 中之郷	共有林／ 生産森林 組合	山かぶら、青首大根	・前年に続き、カヤ、草の原野を火入れ ・燃え草補充に杉枝を散らす	永井氏、中之郷、摺墨集落有志、ウツディバル余呉
2010年 8月	余呉町・ 中河内	共有林／ 中河内区 有林	山かぶら、万木かぶ、F1 辛味大根	・イブキザサ密生、低木が点在する原野を火入れ。火勢強。生育良・土壌調査、植生調査、埋土種子調査実施	永井氏、摺墨、中河内の有志の方

(注1)日野菜かぶは湖東・日野町鎌掛(かいがけ)在来。紅白の配色が美しいごぼう根様の蕪。町外他府県にも産地波及。

(注2)河内(こうち)蕪は越前在来。「赤かぶ生産組合」(味見河内)、「福井焼畑の会」(福井市)が長年活動を続けている。

(注3)万木かぶは安曇川在来。椋川村の自在坊集落には白蕪の在来種が伝承されてきたが途絶えた。

(注4)1950年代頃まで続いた湖西一帯のホトラ山焼きをイメージしたTV映像(里山特集)のために火入れ。

筏がつなぐまち

一保津川筏復活プロジェクトの意義を考える①—

大阪商業大学 原田禎夫

近年、環境問題への意識の高まりとともに、河川管理においても市民参加の重要性が指摘され、各地でさまざまな取り組みが進められている。その一方で、古くからいわれる上下流問題に代表されるように多様な利害関係が複雑にからみあう流域の中で、どのようにして実効性のある市民参加を実現するのか、さまざまな議論がなされている。昨年のノーベル経済学賞を受賞した E.オストロムは、多数の主体によって共同利用される自然資源の管理における最大の問題として、資源を利用する主体どうして協調関係が構築されない「非協力状態」を指摘している (Ostrom 1990)。

河川や湖沼の水資源や漁業資源の利用をめぐる、同様の問題は世界各地で発生している。では、こうした非協力状態はどのようにして解決されるのだろうか。たとえば、Baland and Platteau (1996) は資源管理に関するリーダーシップの重要性・有効性を指摘した。我が国の川をめぐる議論では、矢作川沿岸水質保全対策協議会 (愛知県) が有名であるが、そこでは漁協や土地改良区の中に中心的な役割を果たした、カリスマ的な人物の存在があった (太田 2005)。

あるいは、琵琶湖 (滋賀県) では行政が提供した流域連携支援策において、中心的な人物のコーディネート力もあって市民団体間の連携が相当程度実現した例も注目されている

(大野 2007)。しかし、こうした



写真: 大勢の観光客が訪れる風光明媚な保津峡も、大雨のあとは大量のゴミが漂着し、大きな問題となっている。

リーダーシップは個人の資質に

大きく依存するだけではなく、それに大きく依存するこのような課題解決はどの流域においても適用可能なものとはいえない。たとえば琵琶湖の事例では、NPO などのいわゆる市民団体と行政や地縁団体といった既存の団体との連携が依然として課題であるとされている。特に、河川の環境問題のように多様な利害関係する課題に対しては、そもそも流域連携を実現することが困難だけでなく、ともすれば都市型の新しい市民団体と伝統的な地縁組織との関係は対立的な関係に陥ることもあり、そのことが課題となっている例は少なくない。

古くから水運が栄えてきたこの保津川の流域でもやはり、古くから洪水や利水をめぐる上下流の対立があり、その中でダム建設や河川開削、水質悪化、さらには希少生物の保全や漂着ごみといったさまざまな「環境問題」が持ち上がっている。

そうした中で、いわば突如として起こった「伝統的な筏の復活」というプロジェクトは、今、地元・亀岡市を中心に川と人々とのかかわり方に、少しずつではあるが大きな変化をもたらしつつある。この保津川では、カリスマ的な人物が存在したわけでもなければ、行政の支援策がはじめにあったわけではない。ただ、川がはぐくんできた歴史や文化の「伝承」という、筏復活プロジェクトによる新たな価値の創出を通じた河川管理への市民参加という視点をもとに、何度かに分けて考えてみたい。

【参考文献】

Baland, J.M. and J.P. Platteau (2003), "Economics of Common Property Management Regimes." Maler, K-G. and J.R. Vincent (eds.) *Handbook of Environmental Economics*, Vol.1, p.127~190.

Ostrom, E (1990), *Governing the Commons*, Cambridge University Press

太田隆之 (2005) 「資源管理における制度構築問題とリーダーシップ — 矢作川の水質管理を事例に」, 環境経済・政策学会編『環境再生』, 東洋経済新報社.

大野智彦 (2007) 「流域ガバナンスを支える社会関係資本への投資」『環境ガバナンス論』p.167-195.

催しのご案内

■余呉での焼畑火入れ体験 <朽木FS>

1. 日時：平成22年8月12日(木)・19日(木) 9:00~16:00
2. 場所：滋賀県長浜市余呉町
赤子山(12日)、中河内(19日)

*詳細は、京都大学東南アジア研究所実践型地域研究推進室(担当:鈴木 rsuzuki@cseas.kyoto-u.ac.jp)までお問い合わせください。

■そばの種まきと手打ちそば体験<守山FS>

1. 日時：平成22年8月21日(土)
9:00~ ソバの種まき
11:00~ 守山産そば粉を使った手打ちそば体験
2. 場所：滋賀県守山市 中山道守山宿街道文化交流館
*詳細は、守山FS研究員の嶋田奈穂子(nshimada@cseas.kyoto-u.ac.jp)までお問い合わせください。

中山間地域活性化に向けた弥栄町の取り組み 生存基盤科学研究ユニット 鈴木玲治

6月20日から22日にかけて、島根県浜田市弥栄町を訪れました。弥栄町では、島根県中山間地域研究センターのやさか郷づくり事務所に常駐する研究員の方々が、科学技術振興機構(JST)のプロジェクト「中山間地域に人々が集う脱温暖化の『郷(さと)』づくり」の下、地元の方々と一緒に弥栄の風土や文化のよさを再確認しながら、地域や人々の持つ力を引き出した地域づくりを目指して頑張っています。今回の訪問では、同センターの特別研究員の一人である福島万紀さんのご案内で、彼女たちのこれまでの取り組みを紹介してもらいました。

福島さんは主に森林担当として活動しており、弥栄町の豊かな森林資源を活用し、人も自然も元気になる郷づくりを目指しています。弥栄町の森林の特徴の一つに挙げられるのは、広葉樹林の多さです。弥栄町では、森林の6割以上を広葉樹林が占めており、スギ・ヒノキの造林地は3割程度に過ぎません。これらの広葉樹林は、出雲地方で20世紀初頭まで続いたたたら製鉄で循環的に利用され、たたら衰退後も木炭生産の場として使われてきたそうです。現在では、これらの広葉樹林のほとんどは放置され、ナラの木の老木化とナラ枯れ^[1]の進行も顕著です。ナラ枯れに侵された老木は感染拡大防止のため、林外に伐出しなければなりません。福島さんは、地元の方々と共に、伐出した感染木を薪として活用できるように、弥栄の森林で活動する人々と薪ストーブの利用者を結びつける活動を行っています。地元の山主さん、薪ストーブ使用者の方と一緒に薪割りをし、丸太のままのマキノ



写真 1: 炭焼き窯。この窯では、モウソウチクを用いた竹炭をつくっていました。

キ^[2]をどれくらい

の価格で取引していけるか、話し合いを重ねています。また、山の知恵や技に学びながらその魅力を伝えていくため、薪割りや炭焼きの講習会も行っています。

また、やさか郷づくり事務所の中で目を引いたのが、絵地図づくりです。これは、研究員と地元の人々が一緒に、日常生活のなかでは見落としがちな、優れた弥栄の自然環境、地域の風習、人々の知恵や技などを見つけていく活動で、「ないものねだり」ではなく「あるもの探し」の営みだそうです。地元の方に話を伺いながら発見したものを、その日の晩に手書きの文章と絵や写真を使って絵地図に仕上げます。そして、次の日は、お話をしてくださ



写真 2: これまでに作成した絵地図の一部を、やさか郷づくり事務所で紹介してもらいました。

った集落の方々の前で発表し、2泊3日で聞き取りから発表までを完結させるそうです。弥栄の様々な潜在力や可能性を掘り起こし、絵地図にまとめて発表会を行

うことで、当初は遠巻きにプロジェクトの活動を見ていた地元の方々も、彼女たちの取り組みに親しみをもって接してくれるようになったそうです。

福島さんは、答えを出すことが大事なのではなく、地域に関わる人々が地域の可能性や魅力を共有し、一緒に考えることこそが大切であるといいます。短い期間での訪問でしたが、我々のプロジェクトにとっても勉強になることが多く、非常に有意義な3日間でした。最後に、この度の訪問でお世話になったやさか郷づくり事務所のスタッフの皆さんに、この場をお借りしてお礼申し上げます。ありがとうございました。

脚注

[1] カシノナガキクイムシが媒介するナラ菌の影響で、ミズナラやコナラなどのナラ類が集団的に枯損する現象。

[2] コナラ属を指す島根地方の方言